

『神の恵み①・神からの祝福』

'22/05/08

聖書箇所:エペソ人への手紙 2章 11-13節(新約 p.375)

つい先週、私たちは「私たちが救われた理由」と題して、一体どうして、神が私たちのような者を救ってくださったのか?エペソ 2:1-10 のみことばから、その理由について学ぶ機会を持ちました。その理由を、今ここで簡単に説明させていただきますと、それは、①神様の憐れみというものごとく深く、②神様の愛が私たちの想像を絶するほど大きなものであったがゆえ、③ただ、神様からの一方的な恵みのゆえ、でありました。つまり、この聖書のみことばが教えてくれているのは、“救われた私たちの側にはなく…”、ただ、神様の側にだけ! 私たちを救うための理由があった! ということです。

命題: 神が与えてくださった救いの恵みとは、どのように素晴らしいのか?

そうして、その続きであるエペソ 2:11 以降のみことばが教えてくれているのは、神様が与えてくださった「救いの恵みの素晴らしさ」であります。だから、今日のみことばの冒頭にはこうあります、『ですから、思い出してください。』(エペソ 2:11)って…。私たちクリスチャンは、繰り返し繰り返し、神様の恵みについてはもちろんのこと…、過去、自分がどんな状態にあったのか?それが今、救われたことによって、どのように変えられたのか?といったことについて、しっかりと復習し、その理解を深めていく必要があるのです。

今日から3回ほどの礼拝を通して、私たちは、エペソ 2:11-22 のみことばから、神様の与えてくださった救いの素晴らしさについて見ていきたいと思います。そうすることによって、今回、このメッセージを聞いてくださった皆さんがますます、自分が救われたことへの確信と、神様から与えられた特権といったものを再認識して下さることを願います。

I・神の祝福に招き入れられた!(11-13節)

エペソ 2:11-22 のみことばの内、今日のところは、11-13節のみことばを学んでいきます。そのみことばが教えてくれているのは、神様が私たちクリスチャンのことを、神の“祝福”へと招き入れてくださった!ということ。そのことを、パウロは、私たちが救われる前の状態と対比することによって、明確に悟らせようとしてくれています。11-13節には、こう記されています。

- 11 ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、
- 12 そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人々でした。
- 13 しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。

①ユダヤ人から、さげすまれ ていた…。

ここ 11-13 節では、3度も、『あなたがた…』という言葉が使われてあります。11 節で、『あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。』とありますように、ここでパウロは異邦人のことを念頭において、これらのことを話しています。…と言うのも、実は、この当時、パウロが書き送った小アジアに住んでいた、多くの民は異邦人であったからです。神様の選びはユダヤ人だけでは決してなく…、異邦人さえも、神様は愛し、その祝福に入れてくださった、とみことばは教えます。しかし、神様の…、そのようなみこころを当時のユダヤ人たちは理解しようとしませんでした…。それどころか、異邦人たちのことを、『割礼を受けていない(者)…』(創世記 34:14; 士師記 14:3 など)とか、『無割礼の者ども』(士師記 15:18 など)などと呼んで、異邦

人たちのことを蔑んで、バカにしていたのです。ここ 11 節で、パウロは、そういったことを話してくれています。「あなたがたは今も、ユダヤ人々から、『無割礼の人々』と呼ばれて、蔑まれているでしょ?」って…。実は、この『異邦人』(ἔθνος)という言葉そのものも、軽蔑的な意味が含まれているのです…。

この当時、ユダヤ人と異邦人は何が違っていたかと言いますと、まずは、「割礼のあるなし」でした…。割礼とは、神様が旧約の時代、イスラエルの民たちに命じられた儀式、契約のしるしで、イスラエル人たちは、男の子が生まれてから8日目に、性器の一部を切り取るという割礼を必ず受けなければならなかったのです。ですから、創世記 17:14 にはこうあって、『包皮の肉を切り捨てられていない無割礼の男、そのような者は、その民から断ち切られなければならない。わたしの契約を破ったのである。』と厳しく戒められており、割礼を受けていない男子は、神との契約を破っただけでなく、真の造り主なる神様のことを信じない者として考えられたのです。

ですから、この当時のイスラエル人たちは、割礼を受けていない異邦人たちのことを、神を信じない民…、救われていない民として蔑んでいたばかりか、憎んでさいたのです。この当時、イスラエルのある者たちは、「異邦人とは、神が地獄の火を燃やすための薪とするために造られた…」などと教える者たちもいたようです。そういったことを裏付ける証拠として…、あの「山上の説教」のマタイ 5:43 には、『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め!』などとあるように、当時の教師たちは、このように教えていたのです。

でも、当時のイスラエル人たちは、大事なことを忘れていました…。それは、所謂、「割礼や行ないが、人を救うのではない」ということです。神様は、ただ、イスラエルの民たちが割礼を受けること“だけ”を望んでおられたのでは決してありません。だから、エレミヤ書 4:4 には、こう教えられています。『ユダの人とエルサレムの住民よ。【主】のために割礼を受け、心の包皮を取り除け。さもないと、あなたがたの悪い行いのため、わたしの憤りが火のように出て燃え上がり、消す者もないだろう。』⇒こういった教えは、旧約聖書に何箇所かあります(エレミヤ 9:25-26; エゼキエル 44:7,9)。神は、ただ単に、イスラエルの民たちが割礼を受けることだけを願っておられたではありません! 大切なのは、肉体よりも、むしろ心の方なのです!

要は、彼らの心が神様の前に開かれているかどうかです。そういったことを、旧約の預言者であった、イザヤやエレミヤ、また、エゼキエルたちは教えてくれました…。そうして、それと同じことを、神様は、今の私や皆さんに対しても願っておられるのです…。

また、こういったことは新約聖書になると、より明確に教えられています。ガラテヤ 6:15、『割礼を受けているか受けていないかは、大事なことでありません。大事なのは新しい創造です。』…また、ローマ 2:28-29、『28 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。29 かつて人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。』⇒皆さん、分かってくださいますか? 大切なのは、肉体的な割礼の有無ではなく、『新しい創造』なのです!

だから、イエス様もヨハネ 3 章で、あのニコデモに対して、「人は新しく生まれなければならない!」ということを繰り返し教えてくださったでしょ! 大切なのは、体の割礼よりも、『心の割礼』なのです! …なのに、私たち人間はすぐに、外見や表面的な形にばかり走りまわってしまいがちなのです。…例えば、聖餐式だって、そうです! 聖餐式で大事なものは、パンよりも、杯よりも、イエス様があの十字架上でなしてくださった犠牲です。…なのに、ここ日本では、やれ聖餐式を授ける側の牧師は、何年以上の経験が無いといけなとか、ある程度の試験をパスして、按手礼を受けていないといけな! なんという形式にばかり、こだわってしまうのです! …そうじゃないでしょうか!

ここ、ローマ 2:29 のみことばには、『御霊による…』とありましたように、私たちが新しく生まれ変わらせてくれるのは、御霊なる神様のお働きによるものです。私たちは、そういったことも、もう既に、エペソ 1 章で学びましたでしょ。

しかし、今日のみことばである、エペソ 2:11 には、**こうあります…**。『…あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、』と続いています。パウロはここで、イスラエル人たちのことを、敢えて、『肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々』と称しています。どうして、こんな…、回りくどい言い方をしているか分かっていただけます？⇒先程見たように、パウロは、イスラエル人たちのことを、「霊的な…、神からの割礼を受けているのではなく、ただ単に、人間の手による…、肉体的な割礼を受けているに過ぎない！」と皮肉っているのです。

しかし、そのように、イスラエル人たちが蔑まれていようと…、実際、異邦人たちは、真の神様を知ることの無い者たちであったということに変わりはありません。つまり、パウロが言うのは、肉だけの割礼を受けていて、本当は救われていないイスラエル人たちも…、あるいは、割礼も信仰も無い異邦人も…、真の神様の前には「五十歩百歩」だと言うのです！

②キリストから、遠く 離され ていた…。

続く 12 節では、救われる前の異邦人クリスチャンたちの状態について説明されています。12 節、『**そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人々でした。**』⇒まず第 1 に、彼ら異邦人たちは、キリストから離されていた、とあります。「キリストが無い状態であった」と訳すこともできます。つまりは、当時の異邦人たちは、約束の民であったイスラエル人と違って、キリスト…、つまり、救い主のことをほとんど知らなかったということです。異邦人たちは、自分たちに、罪から救ってくれるはずの救い主が与えられる (& 与えられた) ということ以前に、まず、自分たちにはそういったような…、救い(主)が必要であるということさえも知らなかったのです。

次に、**こうあります**。『**イスラエルの国から除外され…**』⇒これは、つまり、先程見たように、無割礼の者たちがイスラエルの民から蔑まれていたというだけでなく、神がイスラエルを特別に愛し…、導かれていたという祝福を異邦人たちはあまり見る事ができなかった、ということです。創世記 12:3 で、神は、**イスラエルの祖先であったアブラ(ハ)ムに対して、こうおっしゃられました**。『**あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。**』⇒このように、神様は、アブラハムをお選びになり…、そして、その子イサク、ヤコブたちを祝福してくださいました。しかし、それは、決して、イスラエルの民たち“だけ”を救うというような御計画ではありませんでした。今、お読みした個所に、『**地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。**』とありましたように、イスラエル民族を通して、彼らの信じる神様こそが真の神であられるということ、他の民族にも教えるためであったのです。

そして、今日のみことばでは**こう続いています**。『**約束の契約については他国人であり…**』⇒これは、つまり、異邦人たちが、神様の約束してくださった契約の内側に居なかった！ということです。神は、イスラエルの民たちにおっしゃられました…。「神であるわたしに従うなら祝福を…、そうでないなら呪いを与える！」って…。神様は、このような厳しい契約をイスラエルに与えることによって、彼らが神様に従い易いようにしてくださったのです。しかし、こういった約束や、神が契約の民であるイスラエルを導いてくださるという約束も、異邦人には何の関係もありませんでした。まさに、異邦人たちは、神様の御導きの外にいたわけです。

その次に、『**この世にあって望みもなく…**』とあります。皆さん、救われる前って、何らかの希望や夢って無かったですか？…あったと思います。ありましたでしょ？しかし、信仰を持つ前の夢や希望って、どのようなものだったでしょう？⇒恐らく、多くの場合は、贅沢したいとか、立身出世…、つまりは、成功したいとか、有名になりたいとか、そういったような…、ある種、欲望の延長のようなものではなかったですか？希望に関しても、そうです。神様を知らない時の希望は根拠の無いものです。しかし、本当の信仰に基づいた希

望はそうじゃないでしょ？「我慢していれば、いつか良くなるはずだ…」というようなものではありません。「神様が、今も、私たちのことを導いてくださっている。例え、思うような結果が伴わなくても、神の前に正しいことをしていこう！」そんな風に変えられませんでしたか？例え、損をするようなことになっても、神様が喜んでくださっている、という確信があれば、それだけで感謝でき…、充実するような…、そんな思いで、皆さんはいらっしゃいませんか？いつも、そうではないかも知れませんが、明らかに、私たちは…、信仰を持ってから変えられたはずですよ！皆さんの目的は…、生き方は、信仰を持つ前とは明らかに違いますよ？かつては、自分のために生きていたのです！自分が喜んでいれば、それで良かったのです。しかし、今は、神様のことを考え…、神様からの評価を気にするようになったはずですよ！

12 節の最後…、『**神もない人々でした。**』とあります。確かに、かつての私たちに、本当の神様は居ませんでした、知りませんでした。かつて…、真の神様を知らなかった私たちは、そこらへんにある作り物の神を信じ、そういった意味の無いものに捧げ物を捧げ、また、ある時には必死にお願いをしていました。そうかと思えば、ある時は占い…、また、ある時には迷信や縁起担ぎ…、かつて、私たちは滑稽で根拠の無いようなものに振り回され、何が正しくて、何が自分の生きるべき道…、なすべき方向なのか、ほとんど何も分かってはいないような者でした。…それは、私たちがかつて、真理を知らなかったからでした。

そんな中、私たちは、ただ自分のために…、ほとんど、自分の欲を満たすために生きていたのではなかったでしょうか？当然、そんな者の行き着くべき場所は、永遠の裁きです。せつかく…、神様からいのちを与えられていながら…、その神様を信じず、感謝もせず、むしろ、神様に逆らって生きてきたのですから…。これが、前回にも学んだ…、本来、私たち人間が行き着くべき先であったのです。

③そんな私たちを、神が 祝福の中へと招き入れてくださった。

『**しかし…**』と、13 節にはあります。ユダヤ人たちが蔑まれ…、かつては、キリストから遠く離されていた、そんな私たちは変えられました…。『**今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされた…**』と、みことばは教えます。

実は、ここで皆さんに、しっかりと理解していただきたいことがあります。少し回りくどい説明ですが、できるだけ順を追って、説明させていただきます。「かつて、私たち異邦人は、神から遠く離れていました。しかし今、神(=キリスト)に近い者とされた…」、そう、みことばは教えますよね？私たち日本人は、「遠い」とか、「近い」と聞くと、何だか…、「なるほど…」。そうやって、段々、神様に近づいていったら救われるのか…と勘違いしてしまいがちです。そうじゃありませんか？

しかし、ここでは、そういったことを教えようとしているわけではありません。実は、ここで、「遠い」とか、「近い」と訳されている言葉は、ただ単に物理的な距離のことだけを教える時に使われていたわけではありませんでした…。

ちょっと、皆さん。エペソ 2:17 をご覧ください。実は、ここでも、先程のエペソ 2:13 と同じ、『**遠(い)**』(μακρὰν)と『**近い**』(ἐγγύς)という言葉の両方が使われているのです。エペソ 2:17、『**それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人々にも平和を宣べられました。**』⇒ここでも、「遠い・近い」の使われ方は同じで、『**遠くにいたあなたがた**』とは異邦人を指し、『**近くにいた人々**』とはユダヤ人たちのことを指します。…ですから、ここで使われている、「遠い・近い」とは、単なる距離のことではなく…、どちらかと言うと、神様との関係のことを、ここで表わしているのです。

実は、この当時、ユダヤ人たちは、自分たちのことを「神に近い者」と呼び、異邦人たちを「神から遠い者」と呼んでいたのです。その理由と言うか、根拠は、ユダヤ人の住んでいるエルサレムには神の神殿があるし、また、神様が臨在される(⇒神の存在や御性質が色濃く現わされること)場所である幕屋や聖所に入ることが許されたのは、ユダヤ人たちだけであったからでした。

この当時の神殿には、「異邦人の庭」と呼ばれる場所があって、異邦人はそこまでしか入ることが許されていませんでした。その奥には、「婦人の庭」があって、ユダヤ人の女性たちは、その奥に入ることができませんでした。その奥には、「イスラエルの庭」があって、一般のユダヤ人たちはそこまで入ることができたのです。ユダヤ人たちは、神と契約を結んだ民として、犠牲を通して、神に近づくことが許されました。しかし、異邦人たちは、ユダヤ教に改宗しない限り、決して、神に近づくことは叶いませんでした…。

もしも、この当時、異邦人が、「異邦人の庭」から奥に入ろうものなら、間違いなく、注意されたはずですよ。「あなたは異邦人だから、これより奥に入ることはできません！」って…。しかし、その時、その異邦人が、「いえ、私は改宗しました。」と言うと、必ず、こう聞いてくれたと思います。「じゃあ、あなたは割礼を受けましたか？」って…。もし、割礼を受けていれば、奥に入れるでしょうし、もし、割礼を受けていなければ拒絶されたはずですよ。…つまりは、神から遠いとか、近いというのには、具体的な基準と言うか…、明確な線引きがあったのです！

ですからね、皆さん…。クリスチャンになるというの、ある種、同じですよ。そこには、具体的な基準…、明確な線引きがあるのです。ここエペソ 2:13 で、パウロは、『しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。』と言います。キリストに近い者とは、『キリスト・イエスの中にある者』のこと…、また、『キリストの血によって』清められた者たちのことなのです！

<励ましの言葉>

ある方は、「段々、クリスチャンになっていく…」というようなことをおっしゃいます。つまり、長い間、教会に通って…、聖書の話聞いて…、いろんな聖句を覚えて…、いつしか奉仕もするようになって…、そうしていく内に、牧師から、「バプテスマをお受けになられませんか？」という声がかかってきて…、バプテスマを受けたら、自分はクリスチャンになる、というような感じですよ。つまり、段々と…、クリスチャンになっていく…、クリスチャンらしく変えられていく、ということです。言わば、クリスチャンと、ノンクリスチャンとの境目が明確では無いのです。

しかし、そういった考え方は、聖書の教えではありません。聖書は、はっきりと、クリスチャンとそうではない方との違いについて教えてくれています。どうぞ、皆さん。ヨハネ 3 章を思い出してください。イエス様は、ニコデモに対して、こう教えられました。ヨハネ 3:3、『イエスは答えて言われた。「まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」』⇒つまり、人が救われるためには、大きな変革…、『新しく生まれ(る)』ということが必要だと言うのです。

また、「山上の説教」でイエス様は、こう教えてくださいました。マタイ 7:13-14、『13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。』って…。つまり、そこには、間違いなく、皆さんの選択が…、神に対する明確な意志表示が必要なのです！

また、1 コリント 15:1-2 には、このように教えられています。『1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことはしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。』⇒今、お読みしました部分には、『あなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら…』という注意点がありました。つまりは、言い換えるなら、「よく考えもしないで…、信じたつもりになってしまうことが有り得る」ということです。よく理解しないまま、信じたつもりになってしまっているなら…、そこに救いはありません。本当の信仰が、そこには無いからです。…ですよ？

果たして、皆さんはいかがでしょう？…あなたは、信仰によって新しく生まれ変わらせられたのでしょうか？また、あなたは、よくよく考えて、例え狭い門であろうと、この狭い門から入って、このイエス・キリストを…、いえ、このイエス様だけを真の神、私の救い主として信じるのだ！という決心をされたのでしょうか？いや、大切なのは今ですよ！今、あなたは、このイエス様を信じ、イエス様と強い結びつきで繋がっている！と言い得るのでしょうか？

イエス様は、あのヨハネ 15 章で、『5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。』(ヨハネ 15:5-6)ということをお教えくださいました。

⇒イエス様を信じて救われた皆さんは今、イエス様と継ぎ合わされて一体とされているのです！本来、私たち異邦人は皆、神様の契約からも外れ、救われる可能性はゼロでした！いえ！例え、ユダヤ人であろうと、その心が開かれて、イエス様を信じないと救いはありません！…でも、そんな私たちの心を神様が開いて(ルカ 24:45、使徒 16:14)、聖霊なる神が私たちに真理を教えて、私たちがイエス様のことを信じるようにくださったのです。このように、救いという恵みは、100%神様の御業ですよ！だから、先週も学んだように、私たちは自分自身を誇るのではなく、神様だけを誇るのです！

すみません。本当は、もう少し詳しくお話したかったのですが、今日は、この後、「教会規則の説明会」があるので、もう礼拝を終わらないといけません。…どうか、まだ、このイエス様を信じず、この神様からの恵みである救いに預かっておられない皆さんには、1日も早く、イエス様を信じて、救いの恵みに預かってくださることをお勧めします。…と言いますのは、そこにしか、本当の祝福や希望といったものが無いからです。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。